氏名（本籍）	飛田 和樹（東京都）
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位番号	甲第９７号
学位授与の日付	２０２６年３月２０日
学位授与の要件	学位規則第５条第１項の規定該当
学位論文題目	民生委員が有する相談ネットワークの構造と活動における意欲・負担感に関する実証研究
研究審査委員	主　査　　斉藤　雅茂　　日本福祉大学　教授 副　査　　湯原　悦子　　日本福祉大学　教授 〃　　小松　理佐子　日本福祉大学　教授 学外審査委員　杉原　陽子　　東京都立大学 都市環境学部　教授

論文内容の要旨

本論文は、地域福祉の重要な担い手である民生委員・児童委員（以下、民生委員）の活動意欲や負担感に影響する要素として「相談ネットワーク」に着目し、その主要な類型と変容過程の記述、および、相談ネットワークの拡充が民生委員活動への意欲や負担感等にもたらす影響を解明しようとしたものである。関連する先行研究のレビューに加えて、現役の民生委員を対象にして独自のネームジェネレーターを用いた大規模質問紙調査とインタビュー調査を展開した意欲的な研究といえる。本論は「はじめに」と「おわり」を除いて、９つの章で構成されている（本文 155 頁、資料 18 頁、引用文献 177 点（うち英文誌が 45 点））。

はじめに
第１章　民生委員の担い手不足とその要因
第２章　民生委員活動における意欲や負担感の要因に関する先行研究の知見
第３章　民生委員の相談ネットワークと意欲・負担感
第４章　民生委員の委嘱に至る背景と活動における相談ネットワークの変容
第５章　民生委員の相談ネットワークの特性と類型
第６章　民生委員の意欲・負担感に影響する相談ネットワークの様態と委員の性差
第７章　民生委員の相談ネットワークと Well-being、意欲・負担感による媒介効果
第８章　民生委員活動の相談ネットワーク拡充に向けた試行的取り組み
第９章　民生委員活動の継続性に資する相談ネットワーク構築支援に向けて
おわりに

第１章から第３章では、文献レビューに基づいて、近年における民生委員の担い手不足（欠員）問題の動向とその要因を概観するとともに、民生委員活動における意欲や負担感が欠員問題に直結する重要な課題であることを指摘している。その際に、民生委員の業務の特性上、従来のパーソナル・ネットワーク概念のなかでも、とりわけ相談相手との関係から構成される「相談ネットワーク」に焦点を当てる必要性を論じている。そのうえで、本研究の目的として、[1]民生委員の相談ネットワークの変容過程を明らかにすること、[2]民生委員の相談ネットワークの特性および類型を明らかにすること、[3]民生委員の相談ネットワークおよび性差が意欲・負担感に与える影響を明らかにすること、[4]民生委員の相談ネットワークと意欲・負担感が Well-being に及ぼす効果を明らかにすること

の４点を提示している。

つづく第４章および第５章では、民生委員の相談ネットワークの変容過程とその様態の解明を目的として、定性的・定量的分析を展開している。相談ネットワークの変容過程については、インタビュー調査に基づく質的分析を通じて、新任期における基本的情報の不足、地域における役割の増加、個別支援における困難、役職者としての業務といった段階を経て相談ネットワークが変容していくこと、また、相談相手に対する期待と相手の対応との一致度によっては関係が途絶するリスクがあることなどを明らかにしている。これらの結果から、民生委員が直面する各段階において適切な相談相手を確保することの重要性を指摘している。さらに、民生委員を対象とした大規模調査データ（ケース〔回答者個人〕単位で 2,959 人、ダイアド〔二者関係〕単位で 10,481 のつながり）を用いた分析により、民生委員の相談ネットワークは、①豊富・民生委員中心型（6.2%）、②豊富・バランス型（8.9%）、③中程度・フォーマル型（21.7%）、④中程度・インフォーマル型（8.7%）、⑤少数・フォーマル型（20.5%）、⑥単一・民生委員中心型（34.0%）の６タイプに分類できることを示している。また、相談相手が少数もしくは単一のタイプが全体の半数以上を占めている点を明らかにしている。

第６章および第７章では、相談ネットワークのタイプが民生委員活動への意欲および負担感に及ぼす影響の解明を試みている。大規模調査データの分析から、女性に比して男性民生委員の方が相談ネットワークの影響を強く受けており、男性民生委員では相談ネットワークが豊富であるほど意欲が高まる傾向が確認されている。一方、女性民生委員においては、相談ネットワークの豊富さがかえって負担感の増大につながる可能性が示唆されており、性差を考慮した支援の必要性が指摘されている。加えて、豊富・バランス型の相談ネットワークを有する民生委員は Well-being 指標が良好であるのに対し、量的には豊富であっても相談相手の属性に偏りがあるタイプや、相談ネットワーク量が乏しいタイプでは有意な差が認められないことが示されている。また、豊富・バランス型の相談ネットワークを有する民生委員ほど意欲が高く、負担感が低い傾向にあることから、相談ネットワークと Well-being との関連の一部が意欲および負担感を媒介して説明されうることを明らかにしている。これらの結果を踏まえ、民生委員の相談ネットワーク形成に向けた支援の重要性を指摘している。

以上を踏まえ、第８章では、民生委員の多様かつ豊富な相談ネットワーク構築に向けた試行的実践を展開している。具体的には、相談ネットワークの構築を委員個人の自助努力に委ねるのではなく、地区の枠を超えた市域レベルでの同期委員による「民生委員期別座談会」や、大学生および研究者による高齢者世帯への訪問活動（民生委員児童委員友愛フレンズ事業）を実施している。その結果、いずれの取組も関係構築の基盤となる近接性・同質性・互恵性の認識に寄与しうること、相談ネットワークは可変的なものであり、豊富・バランス型の相談ネットワーク構築に向けた契機となりうることを改めて提示している。

さいごに、第９章では、総合考察として本研究の学術的および政策的貢献、ならびに研究上の限界を整理している。社会福祉学および地域福祉研究への貢献として、①民生委員の相談ネットワークの様態および変容過程を定量的・定性的に解明した点、②民生委員の相談ネットワークと意欲・負担感および Well-being との関連を定量的に実証し、相談ネットワークの類型や相談関係の寄与度を提示した点、③民生委員研究および地域福祉研究における社会的ネットワーク理論の応用可能性を示した点を挙げている。今後の課題としては、縦断研究への発展可能性、変数測定方法の精緻化、組織・団体レベルのネットワークや地域特性といった要因の検討、本研究成果を踏まえた相談ネットワーク構築支援プログラムの確立などを挙げている。

論文審査結果の要旨

１．審査経過

2025 年 10 月 9 日の第６回福祉社会開発研究科社会福祉学専攻会議において、飛田和樹氏の第１次審査（秋季）博士学位審査請求論文が受理された。学内審査委員３名（斉藤雅茂、湯原悦子、小松理佐子）は、それぞれに提出論文を精査した上で、同年 11 月 4 日に対面で書類審査および口頭試問を実施した。本論文の概括的評価と論点について意見交換し、修正すべき箇所を確認した。同年 12 月 11 日第８回大学院福祉社会開発研究科社会福祉学専攻会議において第 1 次審査は合格となった。その結果を受けて、同年 12 月 12 日に公開発表会（名古屋キャンパス）に臨んだ。口頭試問および公開発表会における指摘事項について加筆･修正を行ったうえで、2026 年 1 月 9 日に最終稿が提出された。同年 2 月 16 日に最終試験（口頭試問・対面）を実施し、同日中に学内審査委員３名による最終試験の結果について審議した。学外審査委員の杉原陽子氏（東京都立大学都市環境学部教授）からの審査報告書（別添）を総合して、本論文は博士（社会福祉学）の学位授与にふさわしいとの結論に達した。

２．論文の評価

飛田氏の提出論文は、以下の４点で学術的な新規性と独創性を有している。第１に、民生委員が保有している「相談ネットワーク」に着目し、定性的な分析に基づいて、その成立・変容過程についての試案を提示できている点である。第２に、その「相談ネットワーク」の実証的な記述・検証方法として、ネームジェネレーターを用いてケース単位･ダイアド単位での定量的な解析を展開している点である。民生委員の「相談ネットワーク」について、豊富・民生委員中心型から単一・民生委員中心型までの６つの類型を提示し、その実践的な示唆を得ている点は社会福祉学の博士論文として大きな意義がある。第３に、設定した４つの研究目的に対して、3,000 名規模の質問紙調査と 10 名への個別インタビューを設計・遂行し、量的・質的な実証的分析法を多様かつ適切に組み合わせて、議論を展開している点である。第４に、記述分析や関連要因の解明に留まらず、予備的なものとはいえ、それを踏まえた実践の試行にまで着手し、本研究で着目した「相談ネットワーク」が可変的な要素であることを示した点である。得られた所見に対する解釈や考察・政策的な含意についてまだ課題は残されているものの、各章は手堅くまとめられており、それぞれ一定の成果を上げている点は高く評価できる。

学外審査委員の杉原陽子氏からは、民生委員への質的調査と量的調査の結果を統合した混合研究法に基づく多角的検証に加え、得られた知見を踏まえたネットワーク構築支援の試行的実践も行っている点において、地域福祉分野における学術的価値と実践的意義を兼ね備えた優れた研究であるとの評価を得た。とくに、(1）質的インタビュー調査と大規模量的調査を統合した混合研究法により多角的検証を展開している点、(2）ネームジェネレーターで収集したネットワーク情報に基づき民生委員の相談ネットワークを類型化し、支援の量および種類に関する構造的特性を明示した点、(3）ネットワークの「構造面」のみならず「機能面」をも統合した分析視座を採用し、類型差によって生じうる影響を援助成果・役割ストレス・Well-being の各指標から多角的に検討した点、(4）得られた知見を基に、民生委員間の関係強化や地域関係者・大学生との協働を含む支援プログラムを試行し、その実践的効果および実装可能性を検討している点、(5）経験や主観に依存しがちな当該分野の研究にお

いて、社会的ネットワーク理論に基づく分析枠組みを設定し、それに関する知見を提示している点において、飛田氏の博士論文は高く評価されている。横断研究であることによる因果関係の不明瞭さ、個人・地域レベル変数のさらなる精緻化、支援プログラムが試行段階にある点については今後の課題として適切に整理されており、理論・政策・実践の各側面に対し、今後さらに大きな貢献が期待できる発展性の高い研究であると評されている。

審査委員からは、口頭試問および公開発表会で示された指摘事項に真摯に対応し、短期間のうちに適切な修正を加えて博士論文としての完成度を高めた点が高く評価された。加えて、研究テーマの設定が妥当であり、保護司をはじめとする関連他分野への応用可能な知見が得られていること、さらに実証的な研究手法を堅実に展開し、学術論文として適切な考察がなされている点についても高い評価が与えられた。また、これまでに筆頭著者として査読付き論文 6 本を公刊し、第 2 著者以降の共著による大学紀要等 5 本、学会報告 9 件など、社会福祉関連分野において精力的に研究成果を発信してきた実績も高く評価できる。一方で、今後の発展的課題として、相談ネットワークのタイプや性差に対応した具体的な支援・介入方策の提示、少数・フォーマル型や単一・民生委員中心型の場合であっても意欲等を高めるための方策の分析、さらに相談ネットワークの「構造」に関するより拡張的な分析の可能性などが指摘された。以上のように、今後取り組むべき課題はなお残されているものの、論文全体としての完成度は高く、社会福祉学における課程博士論文として十分な水準に達していると評価された。

３．最終試験（学力の確認）の結果

2026 年 2 月 16 日に最終試験（口頭試問）を実施した。飛田氏より事前に用意された口頭試問提出資料に基づいて、第 1 次提出以降の修正点とその理由について簡潔に説明された。それを受けて、審査委員から本研究に残された課題を中心に質疑等が行われ、いずれも誠実かつ真摯に回答された。語学力の審査として、提出された"Abstract of doctoral dissertation"の一部についてリーディングと意訳を実施したところ、ともに正確に行われた。本文において多数の英語論文・学術書が適切に引用されている（全 177 点の引用文献のうち、45 点が英語論文および学術書（訳書を除く）であった）ことからも博士学位に相応しい英語力を有すると判断した。

４．結論

日本福祉大学学位規則第 12 条に基づき、博士（社会福祉学）の学位を受けるに相応しいと認め、学位論文審査について合格と判定した。

以上